ナチズム期のシュタイナー学校

― 校長ボートマーに着目して ―

有川　優子

キーワード：シュタイナー教育、ボートマー、ナチズム期

1. 研究目的

シュタイナー教育はオーストリア出身の哲学者ルドルフ・シュタイナー（Rudolf Steiner, 1861-1925）によって創始された教育である。その教育を取り入れたシュタイナー学校[1]は、今からおよそ100年前の1919年に、ドイツのシュツットガルトで誕生した。2021年５月時点で世界には、1251校の学校と1915園の幼稚園・保育施設が存在し[2]、100年を経た今現在も世界中に広がり続けている。日本においては7校[3]のシュタイナー学校と60園[4]のシュタイナー幼稚園・保育園・そのほか加盟団体がある。日本に存在する７校のシュタイナー学校のうち、３校はユネスコスクールの加盟校[5]であり、2016年には３校とも文部科学省ESD重点校形成事業であるサスティナブルスクールとして認定された[6]ことから注目を集めている。特にシュタイナー教育の実践報告に関しては多くの書籍が出版されており、国内の代表的なものとしては、子安（1975）[7]、広瀬ら（2020）[8]があり、日本のシュタイナー学校から出版されたものとしては、シュタイナー学園編（2012）[9]、京田辺シュタイナー学校編（2015）[10]がある。

こうした研究でその実態が検討されてきたシュタイナー教育は、100年間の歩みの中で、その存続が危ぶまれた時期がある。それはナチスによってドイツ全土のシュタイナー学校が閉鎖に追い込まれた1933年～1945年のナチズム期である。ドイツ全土のシュタイナー学校が閉鎖され、一部の学校は建物自体も破壊されたシュタイナー教育であるが、当時のシュタイナー学校の教師や生徒はナチズム期をどのように生き、そして後世へとつないだのか、その解明が求められている。

遠藤の論文（2017）[11]（2019）[12]は、ナチズムとシュタイナー学校の関係を解明する上で重要な論文であるが、未だナチズムとシュタイナー学校の関係については解明されていないことも多い。遠藤はナチズム体制下のシュツットガルトのシュタイナー学校（Freie Waldorfschule Uhlandshöhe in Stuttgart）において、1934年１月時点では音楽教師のP.バウマンが校長を務め、1938年４月１日付で強制閉鎖された後、1945年10月８日には再開したことを明らかにしている。また遠藤（2019）は、シュツットガルトのシュタイナー学校が強制閉鎖された時に語られ

た教師たちの言葉について、Werner（1999）[13] を参照し、「『学校はいつの日か（遍歴の旅から）戻ってくるだろう』という隠喩的言葉に託して、ナチズム崩壊後の学校再開という希望が語られた。」[14] と触れてはいるものの、十分には深めていない。

ところで、近年 Selg（2019a）[15] に、ある校長の影響により閉鎖が延長されたという証言がある。それがボートマー（Fritz Graf von Bothmer, 1883-1941）である。しかし、シュタイナー教育の入門書の一つである西平直『シュタイナー入門』（1999）[16] や、100 周年を記念して出版された広瀬俊雄ら編『シュタイナー教育 100 年－ 80 カ国の人々を魅了する教育の宝庫－』（2020）[17] を始め、ナチズム期のシュタイナー学校に焦点を当てた遠藤の研究など、日本の研究ではボートマーに関して触れられていない。

そこで本稿では、日本のシュタイナー教育に関する研究では扱われたことのない 3 つの史料を基に、ボートマーの生涯及び活動内容と、ナチスによって強制閉鎖に追い込まれたシュタイナー学校で閉鎖される前々日と前日に、ボートマーら教師たちが生徒たちに語った内容を明らかにして、ナチズムとシュタイナー学校の関係の一端を解明していく。

本稿で主に用いる史料は、1985 年から 1996 年までシュタイナー学校の教師を務め、1996 年以降はシュツットガルトの大学でシュタイナー教育セミナーの講師を務める Loebell（Peter Loebell, 1955- ）が書いたボートマーの生涯と活動に関する史料（史料 1）[18]、2019 年シュタイナー教育 100 周年を記念し、シュタイナー学校の教師の同意を得て公表された、強制閉鎖時の教師のスピーチ（史料 2）[19]、強制閉鎖時のボートマーによる最後のスピーチ（史料 3）[20] である。

たとえば史料 3 では、シュツットガルトのシュタイナー学校が強制閉鎖される前々日と前日に教師が生徒に語ったスピーチが記録され、校長ボートマーのスピーチも記録されている。本稿をとおして、強制閉鎖に追い込まれたシュツットガルトのシュタイナー学校では、教師は生徒たちに何を語り、どのような思いを託したのかなどを検討していきたい。

2. ナチズムとシュタイナー学校

まずは当時のシュタイナー学校が置かれた状況を、先行研究に学び整理しておく。

遠藤（2017）[21] によるとナチズム期にはドイツ全土に 8 校のシュタイナー学校が存在し、ヒトラーが首相に就任した 1933 年 1 月時点では 3,200 人の生徒が学んでいた。

Dietrich（2006）は、ナチズム体制下におけるシュツットガルトのシュタイナー学校の校長に関して、ボートマーが 1934 年に、P. バウマンから校長を引き継ぎ、1935 年からシュツットガルトのシュタイナー学校の校長を務めたとしている [22]。遠藤（2017）によると、やがてナチスの弾圧により、ドイツのすべてのシュタイナー学校が閉鎖に追い込まれることとなったが、その態様は自主閉鎖と強制閉鎖と異なるものであり、閉鎖時期も異なっていた [23]。

そして遠藤は、シュタイナー学校の教師によるナチ当局への働きかけによって一旦は発令さ

れたシュタイナー学校への弾圧処置が撤回されたことを明らかにし、このシュタイナー学校の教師からのナチ当局への働きかけは、シュタイナー教育を存続させることが目的であったのではないかと仮説的に結論づけている。また遠藤（2019）はシュタイナー学校を含む私立学校に適用されるドイツの憲法「私立学校を設置する権利」の設立には、間接的にシュタイナー学校が介在していたことや戦後のシュタイナー学校再建について取り上げている[24]。

ナチズム期の教員に関しては、1933 年 4 月に「職業官吏再建法」が制定されたことにより、非アーリア人（端的にはユダヤ人 : 遠藤）及び政治的に信頼できない人物（特に共産党・社会民主党員等：遠藤）が公務員から罷免・免除され、免れた教員は「ナチス教員連盟」（NSLB）[25] に加入することとなった[26] という。1936 年時点でドイツ全教員の 97％がナチス教員連盟に加入し、そのうちの 32.1％はナチ党員となっていた[27] という。

遠藤（2017）によると、シュタイナー学校は校長を配置しない規則であるが、ナチズム期においては、ナチズムの「指導者原理」（Führerprinzip）がシュタイナー学校にも適用され、校長は学校における「指導者」（Führer）として位置づけられ、当該の学校に関するすべての事項を単独で決定できる権限が付与されていた[28]。遠藤（2017）は Rolf（1963）[29] を参照し、バイエルン州及びハンブルク州においては「私立学校の校長資格としてアーリア人であることに加えて、ナチ党への入党義務が課せられた」[30] ことを挙げている。ボートマーが校長を務めたシュツットガルトはヴュルテンベルク州に属しているため、入党義務が課せられていたかは定かではないが、ボートマーのナチ党への入党は確認できていない。

また遠藤（2017）は Werner（1999）[31] を参照し、1934 年、ヴュルテンベルク州文相メルゲントハラー（Christian Mergenthaler）は、新年度からの第一学年の生徒受け入れを禁止したが、シュタイナー学校の教師によるナチ当局への働きかけにより、1935 年 1 月には、「1934 年 2 月に出していた命令を撤回して、新年度から一年生の生徒受け入れを 40 名に限り許可する旨の命令を出すに至った」[32] ことを挙げている。

遠藤の論文（2017）で取り上げられた 1937 年 5 月 29 日付で提出されたナチス教員連盟の支部によるシュツットガルト校への査察報告書には、シュツットガルト校がナチズムの教育とは相反するものであったことが報告されている。遠藤によればその査察報告書には、シュツットガルト校では「『音楽的・芸術的教育』が重視されているが、ナチズムの学校が第一に要求する人物教育・意志教育はほぼ完全に無視されている。シュツットガルト校の教育方法は現在でもなお国際主義的であると特徴づけなければならない。…（中略）…この学校の教員室には現在でもヒトラー総統の写真は飾られていない。」[33] と記されていたという。

またナチズム期のシュタイナー学校について詳しい Priestman（2009）[34] は、シュタイナー学校が強制閉鎖へと追い込まれたのは、オルタナティブな教育の一つであるシュタイナー学校が、国家社会主義に対する脅威であると考えられたためである[35] と論じている。

ナチズム体制下におけるドイツの学校教育は、ヒトラーの「民族国家の教育原則」に基づき、

同質化され、シュタイナー学校を含む私立学校ではナチ当局により「『公的な必要性』の有無の厳しい再審査を受け、『ナチズム的ドイツ人』の育成という『政治的役割』を果たしていると認定された私立学校以外はその認可を取り消された」[36]という。

シュタイナー学校のナチズムの教育に反する形で独自の実践を貫き通そうとしたことが、やがてはドイツ全土のシュタイナー学校閉鎖へと追い込んでいったのではないかと考える。

次にナチズム期にシュツットガルトのシュタイナー学校で校長を務めたボートマーの生涯と活動及びボートマーが考案した「ボートマー体操」を取り上げることによって、シュタイナー学校とナチズムの関係の一端を探る。

3. ボートマーの生涯と活動及び「ボートマー体操」(Bothmer Gymnastik) について (史料 1)

3-1. 史料情報

史料 1 は Bodo von Plato が編集し、2003 年に Verlag am Goetheanum（ゲーテアヌム出版社）から出版された著書 Anthoroposophie im 20. Jahrhundert: Ein Kulturimpuls in biografischen Porträts『20 世紀の人智学：伝記的肖像にみられる文化的衝撃の製本版』（訳：筆者）に収録されている Loebell が書いたボートマーの伝記である。全 1166 頁で人智学関係者の伝記が収められている。同書はシュタイナー教育の中心的な研究所である「ゲーテアヌム」（Goetheanum）から取り寄せたものであり、2021 年 2 月に入手した。

3-2. ボートマーの生涯と活動

Loebell（2003）は史料 1 において、ボートマーの生涯と活動を整理している。本項では同書を翻訳・整理するかたちで、①幼少期～ 18 歳まで、②軍人時代、③シュタイナー学校の体育教師時代、④ナチズム期のシュタイナー学校の校長時代の 4 つに区分し、整理していく。なお、あらかじめ大枠を示せば表のとおりである。

ボートマーはバイエルン国王大佐である父モリッツ（Moritz Graf von Bothmer, 1845–1895）の息子として、1883 年にミュンヘンで生まれた[37]。ボートマーの男性の先祖は何世代にもわたり、歩兵部隊の将校を務め、バイエルン国王の側近を務めるような人物だった。このような軍人の家系に生まれたボートマーは兵士として生きていくのが当たり前だった。

・6 歳～ 18 歳　(1883 年～1901 年)

6 歳から 12 歳までミュンヘンの「ラテン学校」（Lateinschule）に通い、休暇はメックレンブルク州で家族の別荘で過ごした。ボートマーはパジェリー（貴族生まれの男児が入学する学校、教育所）に入学する直前に父を突然亡くした。パジェリーに通っていた 14 歳～ 18 歳

まではラテン語やギリシャ語を多く学ぶとされている「基礎の人間的な教育」（grundlegende humanistische Bildung）を受けていた。当時のボートマーは内向的で謙虚な性格で自己主張ができずに苦しんでいた。

・18 歳～　（1901 年～1921 年：軍人時代・シュタイナーとの出会い）

18 歳のとき、ボートマーは「見習士官」（Fähnrich）として国王の軍隊の候補生となり、1904 年には位があがり、「少尉」（Leutnant）になった。この頃からボートマーは軍隊に所属する若者の指導について関心を持つようになった。

軍隊のやり方に矛盾を感じていたボートマーは、「防御力」（Wehrkraft）と呼ばれる活動の中で多くの若者とハイキングに行っていた。ボートマーはこのハイキングに行くことについて、軍隊に対しては体を鍛える目的で行っていると言いながら、実際は「自制心」（Selbstbeherrschung）を鍛えるために行っていた。彼らのエネルギーはたくましい体の中からではなく、自分の感情に打ち勝つことから出てくるエネルギーであった。

1904 年、ボートマーの母はシュタイナーの講義を聞いてまもなく当時シュタイナーが所属していた「神智学協会」（Theosophischen Gesellschaft）に入り、ボートマーもシュタイナーの思想を基盤とした「人智学」（Anthroposophie）に刺激を受け、1907 年に一員となった。このとき、シュタイナーから教育の道へと進むことを提案されたが、ボートマーはこの段階では教育の道へ進むことはしなかった。

1902 年から神智学協会に所属していたシュタイナーであったが、協会内部での対立により、1913 年には除名されることとなる[38]。その後、シュタイナーは「人智学協会」（die Anthroposophische Gesellschaft）を発足させ、指導者として活動した[39]。

1914 年、第一次世界大戦が始まり、ボートマーの勤務地はフランス、セルビア、ルーマニアへと変わった。1920 年 10 月の母の死を機に、軍人家系に生まれたことや過去と祖先との結びつきがなくなったと感じたボートマーは、「歩兵部隊」（Infanterie）で働く意義が見いだせずにいた。この頃は軍隊において国家社会主義的な傾向が強くなってきている時期でもあり、ボートマーはゲーテの考えた理想的な世界主義の実現を探していた。

1922 年 1 月、ボートマーは久しぶりにシュタイナーの講義を聞きにミュンヘンを訪れた。Max Wolffhügel（1880-1963）がシュタイナーにボートマーについて知らせていたことから、ボートマーは講義の後、シュタイナー学校に来て授業に参加した後、教員として働いてほしいと頼まれた。1922 年 5 月、ボートマーはミュンヘンでシュタイナー講義を聞き、その際、国家主義の人たちによる妨害に巻き込まれた。

第一次世界大戦と革命の終わりからボートマーは「将校」（Offizier）としての任務に対し、深く疑問を持つようになった。君主政治が終わった後、「道徳性価値」（sittlicher Werte）が崩壊している兵士たちを見たボートマーはショックを受け、それを機に軍隊を辞め、教育の道

へと進むことを決心した。そして1922年6月15日にシュタイナー学校から採用され、体育教師として勤めることとなった。それはボートマーが38歳の時であった。

・38歳～　(1922～1934年：シュタイナー学校の体育教師)

軍隊を辞め、シュタイナー学校の教員となったボートマーはボートマー体操を考案した。シュタイナーの人智学の思想や人類学を基に考案されたボートマー体操はシュタイナーにも評価されており、1922年10月終わりに開かれた教員会議においてシュタイナーがボートマー体操を評価すると表明している。

・52歳～55歳　(1935～1938年：ナチズム期のシュタイナー学校の校長)

ボートマーはシュタイナー学校の「校長」(Schulleiters) に任命された。晩年、考案した体操に関する本を出版する。1941年、肺の病気により、死去する。

表　ボートマーの略年譜

年月日	年齢	経歴
1883.12.21.		ミュンヘンにて誕生　(軍人の家系) 父：Moritz Graf von Bothmer (1845–1895) 軍人。 父も含め、ボートマー家の男性の先祖は何代にもわたり、バイエルン国王の側近を務める。
1889 ～1895	6～12歳	ミュンヘンにあるラテン学校に通う。 1895年、父死没。 シュタイナーの「社会三層化運動」に影響を受ける。
1897 ～1901	14～18歳	文化系の教育（＝ラテン語やギリシャ語を学ぶ教育）を受ける。 内向的で謙虚な性格で自己主張に苦しんでいた時期であった。
1901	18歳	見習士官として国王の軍隊の候補生になる。若者の指導に関心を持つ。 軍隊に対しては体を鍛える訓練をしていると言いながら、実際は若者の精神力を鍛えるためにハイキングに行く。
1904	21歳	位が上がり、少尉となるが、軍のやり方に対して矛盾を感じる。 母がシュタイナー講義を聞き、神智学協会に入る。
1907	24歳	ボートマーも神智学協会の一員となる。 軍隊を続けることに迷いを感じる。 シュタイナーから教育の道を提案されたが、このときは応じなかった。
1913	29歳	ヒルデガルド男爵令嬢（父はバイエルン王国の貴族）と結婚する。 勤務地がフランス、セルビア、ルーマニアへと変わる。
1920	36歳	母死没。 軍隊において国家社会主義的な傾向が強まっていた時期だった。
1922.1.	38歳	1月にシュタイナーの講義を聞くためにミュンヘンを訪れる。講義後、シュタイナーからシュタイナー学校で働くことを提案される。5月にはシュタイナーの講義が行われたミュンヘンで国家主義の人たちによる妨害に巻き込まれる。 第一次世界大戦と革命の終わりから、彼は将校としての任務について疑問を持つようになる。君主政治が終わった後、彼は兵士の道徳的価値が崩壊しているのを見てショックを受ける。

1922.6.15 1923.3.1	38 歳	6 月 15 日、シュタイナー学校で採用される。除隊する。 9 月、新しい体育の教育プログラム＝ボートマー体操を考案し始める。 10 月下旬､教員会議にて､シュタイナーからボートマー体操が評価される。生徒からも尊敬されていた。 教員会議にて、ボートマー体操の特徴について紹介する。
1925	40 歳	シュタイナーの妻であるマリー・シュタイナーからの依頼で、ドルナッハ（スイスにあるシュタイナー研究所本部）での俳優指導を始める。 体育の教師として勤務する。生徒や教職員からの評価が高かった。ナチスの権力が強まり、徐々にシュタイナー学校の存在も危なくなる中、ボートマーは授業を続けることに力を注ぐ。最終的には、強制的に校長を任される。
1934	51 歳	ヴュルテンベルク州の文相が新年度からの一年生の生徒の受け入れを禁止される。
1938.3.30.	55 歳	ヴュルテンベルク州の文相によって、シュツットガルト校が強制閉鎖されることが決まり、閉鎖される前にボートマーを含めシュタイナー学校の教師たちがスピーチをする。
1941.	58 歳	晩年、考案した体操に関する本を出版する。 11 月 13 日肺の病気により、病死。ザルツブルクにて死没。

3-3. ボートマーが考案した「ボートマー体操」（Bothmer Gymnastik）について

Loebell はボートマー（1959）[40] を参照し、ボートマー体操について「人間が空間をどのように体験するのかを出発点とし、自分自身がその空間でどのように感じるのか、その空間の力を体で体験し､そして体を動かすことを通して頭と精神を高めるものである。」[41] と述べている。

国際ボートマー体操の公式サイト [42] では、ボートマー体操について、教育分野だけでなく、自己教育・人格開発、ならびに治療、芸術、社会分野でも使用され、体育教師に生徒の運動の発達を理解するための鍵と体育全体が展開できる基礎を提供するものであると記されている。またボートマー体操をすることによって、生徒には健康、自信、運動と協調能力が身につき、それが精神的、道徳的な発達をサポートすると公式サイトでは紹介されている。ボートマー体操は、現在、シュタイナー学校、人智学の枠を越え、世界的に知られている [43]。

Loebell（2003）の史料から、①ボートマーは軍人家系であったが、少尉として軍隊のやり方に矛盾を感じていたこと、②戦争によって道徳的価値が崩壊する若者を目の当たりにし、ショックを受けたボートマーは軍隊を除隊し、シュタイナー学校の教師になったこと、③ナチズム期においてはシュツットガルトのシュタイナー学校の校長に任命されたこと、④ボートマー体操は当時、ナチズムの教育で重視されていた身体的鍛錬とは異なり、体を動かすことによって精神力や頭を育て、体をコントロールすることを目的とした体育であったことなどが明らかとなった。

3-2. の「ボートマーの生涯と活動」を概観すると、ボートマーの軍人時代における経験が、その後のボートマーの体操理論の基盤を形成する上で役立ったと思われる。具体的には、当時軍隊のやり方に矛盾を感じていたボートマーは、軍隊に対しては体を鍛える目的でハイキングに行くと表明しながら、実際は若者の自制心を鍛える目的で行っていたという経験であり、こ

の経験が、頭や精神力を鍛えるボートマー体操の体操理論へとつながったのではないかと考える。また同じく軍人時代に、戦争によって若者の道徳的価値が崩壊していくのを目の当たりにしたボートマーは、戦うための体を鍛え上げる体操ではなく、若者の道徳的価値を更生することを目的とした頭と精神力を鍛える体操理論をつくりあげることに力を注いだと考えられる。

Loebell（2003）の史料において、ボートマー体操はシュタイナーの人智学の思想や人類学を基に考案されたものであり、シュタイナー自身も教員会議の中で評価していたことが記されていることから、ボートマーは、シュタイナーの思想の体現者であったのではないかと考える。

次にナチズム期において校長を任命されたボートマーが、シュタイナー学校閉鎖時に生徒たちやシュタイナー教育関係者に語ったスピーチを取り上げ、ナチズムとシュタイナー学校の関係の一端を探りたい。

4. 1938 年　シュタイナー学校強制閉鎖時の教師とボートマーによるスピーチ　（史料 2）

4-1. 史料情報

史料 2 は、筆者が 2019 年 9 月 7 日～ 10 日の間に、ドイツのシュツットガルトのシュタイナー学校[44]で行われた「シュタイナー教育 100 周年記念式典・シュタイナー教育者のための国際会議 2019」に参加した際に、書籍コーナーで収集したものである。

史料 2 は 100 周年を記念し、2019 年に、Buchhandlung ENGEL Antiquariat（ENGEL 古書店）から出版された Festschrift 100 Jahre Freie Waldorfschule Uhlandshöhe　1919-2019『100 年記念論文集　自由ヴァルドルフ学校　ウーラントの丘　1919-2019』（訳：筆者）に収録されていた Peter Selg の論文である。この論文は Das Weiterleben im Tod: Die Ansprachen der Stuttgarter Lehrer bei der Zwangschließung der Schule 1938「（学校が）亡くなった後も生き残る　シュタイナー学校強制閉鎖時のシュツットガルトの教師たちのスピーチ 1938」（訳：筆者、() 内は筆者の解説。以下、同じ）と題して、シュタイナー学校強制閉鎖時の教師とボートマーによるスピーチの一部が紹介されている。100 周年を記念して出版された著書の構成は、全 275 頁で、「ERINNERN（思い出す）」「ERGREIFEN（つかむ）」「GESTALTEN（形づくる）」の 3 部構成となっている。史料 2 は 1 章に収録されていたものである。

史料 2 には、シュタイナー学校が強制閉鎖される前々日の 1938 年 3 月 30 日に生徒たちに向けられた 19 名の教師によるスピーチの一部が紹介されている。史料 2 のシュタイナー学校 100 周年の記念本が出版された同年、Selg（2019b）は Verlag des Ita Wegman Instituts（イタ・ヴェーグマン研究所出版社）から、Erzwungene Schliessung: Die Ansprachen der Stuttgarter Lehrer zum Ende der Waldorfschule im deutschen Faschismus（1938）『強制閉鎖－ファシズム期のシュタイナー学校の終わりにおけるシュツットガルト校の教師によるスピーチ－』（訳：筆者）を出版しており、その著書には 3 月 30 日と 3 月 31 日にボートマーが語っ

たスピーチの全文が紹介され、加えて史料2で紹介するボートマーのスピーチについて、当時の生徒が保管していたボートマー直筆のものが写真で掲載されている[45]。

このSelg（2019b）の著書は3部構成（全311頁）で、1部には今回100周年を記念して公表された強制閉鎖時の教師のスピーチ（1938年3月30日・31日）、2部にはナチズム期（1933年～1945年）のシュタイナー学校について、3部には1919年9月7日、最初のシュタイナー学校が開校された時のルドルフ・シュタイナーのスピーチとシュタイナー学校の教師でもあり、シュタイナー教育に関する雑誌の編集者でもあったハイデブラント（Caroline von Heydebrand,1886-1938）によるシュタイナー学校におけるルドルフ・シュタイナーと題したシュタイナー教育全般に関する解説が掲載されている。Selg（2019b）[46]によれば、シュタイナー学校では強制閉鎖される前に3回の式典が行われた。

1回目の式典は政府から強制閉鎖の命令が出された後、1938年3月30日の午前に「終業式」（Shulssfeier）として行われ、教員たちは生徒たちに別れを告げた。19人の担任の教師は、合計555人の生徒と保護者と他に招待された人々の前でスピーチをした。その9年前のシュタイナー学校では1155人の生徒が学んでいたが、ナチス政府の弾圧により、次第に生徒数が減った[47]という。

2回目の式典は1938年3月30日の晩に、「シュタイナーの追悼式典」（Feier zum Gedächtnis an den Todestag Rudolf Steiners）（訳：筆者）として行われ、ヴァルドルフ学校協会と教師、保護者や友人が招待された[48]。

3回目の式典は1938年3月31日の晩に、保護者のための終業式と卒業生とヴァルドルフ学校団体のメンバーなど応援してくれた人々のための終業式として行われた[49]。

4-2. 教師たちのスピーチの紹介　（史料2）

1回目の式典時の教師によるスピーチ（史料2）を基に、シュタイナー学校が強制閉鎖される前々日（1938年3月30日）の状況を概観したい。補足としてドイツ語表記のKinder,Kindernは、「子ども」「子どもたち」と訳し、Schüler, Schülernは、「生徒」「生徒たち」と訳す。

1938年3月30日、シュタイナーの13回忌でもあるこの日に、ホールに555人の生徒が集められ、終業式が行われた。

12年生の担任をしていたSchwebsch（Erich Schwebsch,1889-1953）は次のように述べている。

「我々にとっても将来にとっても重要なことは、シュタイナー学校がどのように墓に入るのかということです。シュタイナー学校は破滅したわけでもなく、病気したわけでもありません。ただ自分の心でシュタイナー学校がとても生き生きとしていたことを留めておきま

しょう。」[50]（訳：筆者）。

このSchwebschのスピーチは、Schwebschが、生徒たちに分かりやすいような抽象的な言葉を用いて、強制閉鎖によってシュタイナー学校での活動が今日をもって中断されることはシュタイナー学校が一生復活できないこと（破滅）や、シュタイナー学校に悪い問題（病気）があったことを意味するのではないということ、そして生き生きとしたシュタイナー学校の思い出を心に留めておいてほしいということを伝えたかったものと解釈できる。

５年生のＢクラスの担任をしていたTreichler（Rudolf Treichler,1883-1972）は愛する教育施設が死んだという話をし、８年生クラスのEge（Karl Ege,1899-1973）は次のように生徒たちに話し、シュタイナー学校の将来を託した。

「学校閉鎖は人間の肉体が死んだこと、人間の体が破壊されたことと同じ意味であり、私たちの学校も外見を破壊されました。 土地や建物の所有権が他の人に移ったり、クラスが分解されたりしています。ここで生きていたことや起こったことはもう二度と起こることはありません。学校は非常に賑やかで､そこで過ごすみんなも非常に生き生きとしていました。しかし今、国家によって禁じられました。しかし学校で過ごした日々は破壊できない宝物であり、心のなかのものはすべて破壊できないし、不滅であるから、そのことを君たちはよく覚えておいてほしいです。」[51]（訳：筆者）

このEgeのスピーチは、Egeが生徒たちに、国家の命令によって、すべての活動が中断されたシュタイナー学校だが、心の中にあるシュタイナー学校で過ごした日々は国家に破壊されることなく、生き続けることができること、そして目に見える形ではシュタイナー学校は残らないが、目に見えない形で心の中ではいつまでもシュタイナー学校は存続させることができることを伝えたかったと捉えられる。

Gabert（Erich Gabert,1890-1968）のスピーチは次のようなものである。

「シュタイナーがシュタイナー学校というあまりにも大きなプレゼントをくれたから、この学校に勝るプレゼントはない」[52]（訳：筆者）ことを生徒に伝え、続けて「宝物が壊れてしまって新しく作らなければならないと同じように、学校も壊れてしまっても新しく作らなければいけません。それぞれの心の中の孤独と静けさの中で新しく作ることができます。真剣に心の中で学校を作り直すことを一人一人が始めたら、今は辛くても耐え抜くことができます。」[53]（訳：筆者）

このGabertのスピーチは、Gabertが生徒に将来、シュタイナー学校が復活するためには心

の中で準備すること、そして目の前に厳しい現実があっても、心の中でシュタイナー学校を作り直すことに専念すれば、辛い状況も乗り越えられると伝えたかったことを例証している。

Selg（2019a）によるとGabertは未来のシュタイナー学校がシュタイナー学校の生徒たちによって復活することを確信していた。また同時にシュタイナー学校の生徒たちは国家の全体主義的な政権の基に管理されているナチズム教育が行われている学校に転校しなければならない状況で、彼らの将来が非常に不確かなものであったことを当時の教師たちは理解していた[54]という。

Selg（2019a）はまた、ナチズム期にボートマーに校長を任せたことによって閉鎖前の数年はナチスから許容された[55]とも述べている。

次に3月30日にボートマーが生徒たちに語ったスピーチについて取り上げる。

ボートマーは生前のシュタイナーが1925年3月15日に、シュタイナー学校の生徒たちに向けて書いた手紙を読み上げ、その後、ヴュルテンベルク州の命令によってシュタイナー学校が閉鎖されることについて生徒たちに伝えた。それまでの教師のスピーチでは「閉鎖される」（geschlossen）という言葉は使用されていなかったが、暗に示す形で生徒たちにとって分かりやすい言葉で閉鎖について語られた。

そして最後に、ボートマーは次のような言葉で生徒たちに将来のシュタイナー学校を託した。

「私は今、ここでヴュルテンベルク州の命令によってシュタイナー学校を閉鎖されることについて言わなければなりません。愛の力で愛のある未来が来るまで、自分たちの一番深い心のなかで私たちの学校（シュタイナー学校）を封印しておきましょう。」[56]（訳：筆者）

このボートマーのスピーチについて、ボートマーが生徒たちに、強制閉鎖されるからといってシュタイナー学校が途絶えてしまうのではなく、将来また復活できると信じ、心の中に閉まっておくことが大事であると伝えたかったものとして理解される。

Selgの著書（2019b）[57]にはボートマー自身が直筆で書き、当時の生徒に託したメモが掲載されており、これは当時の生徒であったChristhilde Blume（1923-2012）が保管していたものである。

本項では、強制閉鎖される前々日の1938年3月30日に、3名の教師（Erich Schwebsch, Karl Ege, Erich Gabert）と校長ボートマーのスピーチを一部紹介した。4名のスピーチから、①当時の教師たちは生徒たちに、たとえ、建物が破壊され、外見的にはシュタイナー学校が失われたとしても、生徒たちの心の中にシュタイナー学校での出来事を生き生きと生き続けさせることの重要性を伝えたこと、②そして国家の命令によってシュタイナー学校が奪われたとしても、生徒たちの心の奥深くにあるものは決して国家には奪われないこと、③ナチズム期を生きる生徒たちがナチスを乗り越え、シュタイナー学校を再建する日が来ることを教師は信じ、

生徒たちにシュタイナー学校の未来を託したことが、読み取れた。

次に強制閉鎖前日の最後の式典でボートマーが語ったスピーチを取り上げる。

5. 1938 年 3 月 31 日　ボートマーの最後のスピーチ　（史料 3）

5-1. 史料情報

史料 3 も史料 2 と同様、筆者が 2019 年 9 月 7 日～ 10 日の間に、ドイツのシュツットガルトのシュタイナー学校で行われた「シュタイナー教育 100 周年記念式典・シュタイナー教育者のための国際会議 2019」に参加した際に、書籍コーナーで収集したものである。史料 3 では、史料 2 で紹介した Selg（2019b）の著書 Erzwungene Schliessung: Die Ansprachen der Stuttgarter Lehrer zum Ende der Waldorfschule im deutschen Faschismus（1938）『強制閉鎖－ファシズム期のシュタイナー学校の終わりにおけるシュツットガルト校の教師によるスピーチ－』（訳：筆者）に収録されているシュタイナー学校強制閉鎖時の最後のボートマーのスピーチを取り上げる。

最後の式典となる保護者のための終業式と卒業生とヴァルドルフ学校団体のメンバーなど応援してくれた人々のための終業式は、1938 年 3 月 31 日の晩 8 時から行われた[58]。史料 3 はそのときのボートマーの最後のスピーチである。

5-2. ボートマーによる最後のスピーチ　全文の紹介（史料 3）

史料 3 のボートマーの最後のスピーチも史料 1 、史料 2 と同様に、日本では翻訳されておらず、かつ重要な史料であるため、全文を紹介する。() 内には筆者による補足説明と筆者なりの解釈を記載した。

「今、ここにいるすべての愛する仲間と保護者の皆さんに、私を含め全教員から話します。今私が話しているこの場所から、ルドルフ･シュタイナーもよくスピーチをしており、（シュタイナーは）『保護者は最も愛するもの（生徒）を、この学校で教育を受け、授業を受けられるように連れてくる。』と話していました。そして今私たちは、（生徒たちを）保護者の元に返さなければなりません。でもシュタイナー学校はあなたがた（保護者、生徒たち）とともにこの場からいなくなります。（シュタイナー学校は建物としてはなくなり、保護者も生徒もこの学校から去らなければならないが、学校と離ればなれになるのではなく、共にあります。それぞれの心の中にあります。）（生徒・保護者・教員を含めシュタイナー学校に関係するすべての人は）、お互いに与え、受け取りながら、親密に絡み合う中で、ともに成長し、育ち、開花し、実がなり、成熟してきました。

子どもたちの教育について不安が襲ってきた時､シュタイナー学校のことを思うでしょう、

そしてあなたがたがシュタイナー学校に聞きたいことがある時、その答えはシュタイナー学校にあると私は思っています。（子どもの教育について不安が出てきたときに、シュタイナー学校にその答えを求めれば解決の道を示してくれるでしょう。）

昨日の午前に、『シュタイナー学校が閉鎖する』というきびしい言葉が発表されました。この言葉は口では終わりません。（この言葉が発せられたからといって希望や愛情が徐々に消えていくことを意味しているのではありません。）その日は過ぎ去りました－素晴らしい日でした。子どもたちや保護者から、たくさんの愛情を感じました。それは言葉から感じ取ったものや、言葉にしなくても伝わるものもありました。

それと同時に、私は他のシュタイナー学校の姉妹校からも愛情と友情を感じたことを考えました。非常に遠いシュタイナー学校の保護者と子どもたちからも愛情と友情を感じ取り、そしてシュタイナー学校の卒業生がシュタイナー学校で話したことや活動していたことを思い出しました。

私たちは昨夜、ルドルフ・シュタイナーのことを想ったり、友達のカール・シューベルトの言葉に力をもらったり、オイリュトミー偉大なる芸術に気持ちが高揚したりしました。私たちが考えること、思うこと、願うことを眠りの世界へと沈めましょう－人生の源泉で給水を探すために、眠りの世界に沈めましょう。（私たちが考えていること、想っていること、願うことを心のなかに閉まっておきましょう。夢をしばらく諦め、またいつか良い時が来たときに取り出しましょう。今は思っていることや願っていることはかなわない世の中ですが、それを心の中に閉まっておけば、眠っている間にそれが満たされるでしょう。）

今朝、復活祭の美しさが私たちを迎えた－今、夜になるとまた門を閉鎖しなければならないことを考えます。（朝目覚めた時は素晴らしい日だったのに、夜になったら閉鎖のことを考えます。）

愛する皆さん、今この瞬間、私たちの考えや気持ちをルドルフ・シュタイナーに届けましょう。

エミール・モルトとの思い出や、ベルタ・モルトへの愛と感謝の気持ちを持ったり、私たちの友達の（亡くなった）クリストフ・ボーイとの思い出を思い出したり、彼（クリストフ）が亡くなる前、亡くなった時、亡くなった後にかけて亡くなった方々に思いを馳せましょう。そして彼（シュタイナー）の仕事、彼（シュタイナー）の学校に心を向けましょう。そして彼（シュタイナー）に、学校の礎石に関する詩 “Grundstein-Spruch”（シュタイナーが作った詩）でもってこの学校を守ってくれるように頼みましょう。それから私たちはその詩に耳を傾けましょう。そしてその詩は徐々に消えていくでしょう。（亡くなったシュタイナーにこの詩を捧げましょう。みんなでこの詩を読みましょう。）

私たちはここ（シュタイナー学校）でもらった恩恵に、感謝と幸せの気持ちを持ってここ（シュタイナー学校）から出ましょう。（シュタイナーが私たちのために作った学校に対して、

シュタイナーに感謝の気持ちを届けて学校も守ってくださいという気持ちも届けましょう。そして学校の外に出ましょう。感謝の気持ちと幸せの気持ちをもってシュタイナーが与えてくれた言葉への感謝と幸せの気持ちを届けてここを出ましょう。）

この礎石の詩が、この場所（ボートマーが話している場所）から響く最後の言葉になりますように。

Grundstein-Spruch　礎石の詩　（シュタイナーが残した詩）

愛がある精神の強さ
親切をもって優しさがある精神の光がひきたつように
心の安全から
ゆるぎない精神から

若い人間は
身体の仕事のために
愛情のこもった霊を
魂の明るさを
もたらすことができる

この場所から捧げます：
若い精神を持った人は
才能があって、光をくれる
人間の養育者を見つけるでしょう」

史料３ではナチズム期にシュタイナー学校の校長を務めたボートマーが、強制閉鎖時に生徒たちに語ったスピーチの全文を紹介した。史料3から読み取れることは3点ある。①ボートマーのスピーチから、シュタイナー学校の関係者（子ども、生徒、教員、保護者、関係者）がいかに互いに影響し合い、ともに成長してきたかが読み取れること、②子どもの教育について不安があるとき、その答えをシュタイナー学校に求めれば解決できるとボートマーは考えていたこと、③シュツットガルトのシュタイナー学校に在籍する生徒、保護者、関係者から愛情と友情を感じるだけでなく、他の姉妹校のシュタイナー学校の保護者と子どもや生徒たちからも愛情と友情を感じるとボートマーが語っていることが明らかになり、このことから、シュタイナー関係の関係者は、人と人、学校と学校のつながりが非常に深いものであったと考えられる。

また史料３から、ボートマーが強制閉鎖される前日に、生徒たちに残したメッセージとして、①シュタイナー学校を築き上げてくれた人々、具体的にはシュタイナー学校の創設者であるルドルフ・シュタイナーとエミール・モルト、そしてエミール・モルトの婦人のベルタ・モルト

に対する愛と感謝の気持ちを持つこと、②この学校で過ごした時間や経験に対して感謝と幸せな気持ちを持ってこの学校を去ること、③最後にシュタイナーが作詩した詩を生徒とともに読み上げ、天国にいるシュタイナーが私たちとこの学校を守ってくれるように頼んだことが明らかになった。

6. 仮説的結論

本稿の目的は３つの史料を基に、ナチズム期にシュタイナー学校の校長を務めたボートマーの生涯と活動内容、ナチスによって閉鎖に追い込まれたシュタイナー学校の強制閉鎖時の状況及び最後にボートマーが生徒たちに語ったことについて明らかにすることにより、ナチズムとシュタイナー学校の関係の一端を明らかにすることであった。

３つの史料から、次の６点が明らかとなった。具体的には、①ナチズム期にシュツットガルトのシュタイナー学校の校長を務めたボートマーは軍人の家系で前職は軍隊であったこと、②ボートマーが考案したボートマー体操はナチズムの教育のものとは異なる新しいものであったこと、③ナチズム期にボートマーに校長を任せたことによってナチスから数年間は許容されたこと、④強制閉鎖時の教師が生徒に語ったスピーチ内容、⑤強制閉鎖される前日に、ボートマーが生徒に語ったスピーチ内容である。

仮説的結論として Selg（2019a）のナチズム期にボートマーを校長にしたことがナチスから許容された[59]理由として、ボートマーが元々軍隊に所属していたこと、シュタイナー学校で行われていたボートマー体操はナチズム教育の基本となる身体的鍛錬とは異なるものであったものの、体育教師であったことが、ナチズム期にシュタイナー学校が少しの間、閉鎖の時期が猶予されることと関係しているのではないかと考える。

先行研究で取り上げた遠藤（2017）は、レシンスキー（Leschinsky, Achim: Waldorfschulen im Nationalsozialismus, In: *Neue Sammlung*, Nr. 3, Mai/Juni 1983, S,255-278）がシュタイナー学校とナチズムの間の一定の親和性があったと指摘していることに対し、「ヴァルドルフ学校関係者がナチス当局に『接近』したことが、ナチズムへの《迎合》や《協力》のためであったのか、それともヴァルドルフ教育の理念を存続させるための外的条件整備が目的だったのか、その真相は、ナチズム体制下のヴァルドルフ学校が行っていた人形成の実態解明を俟って、初めて明らかになる」[60]という意図から分析を行い、シュタイナー学校がナチスに「迎合」「協力」した側面とともに、「あくまでもヴァルドルフ教育の原則に基づく人間形成が実践されていたこと」[61]を明らかにしている。

本論の史料を分析した限りにおいて、当初軍人として若者を指導する立場であったボートマーは、精神が荒廃していく若者たちを見て、それを更生することを目的に、「ボートマー体操」（Bothmer Gymnastik）を考案したこと、そしてボートマーは軍隊の訓練において戦闘力とし

てたくましい体を作り上げるために運動するのではなく、精神力を鍛えるために運動することを重視したと考えられることから、ナチスに対しては批判的だったことが考えられる。

しかし上述したように、ボートマーが元々軍隊に所属していたことや、シュタイナー学校で行われていたボートマー体操はナチズム教育の基本となる身体的鍛錬とは異なるものであったが、表面的には体育教師であったことが、ボートマーが強制的に校長を任された[62]こと、そしてナチズム期にシュタイナー学校が少しの間、閉鎖の時期が猶予される[63]ことと関係しているのではないかと考える。

シュタイナー学校の強制閉鎖時の教員によるスピーチに関しては、当時、そのスピーチは生徒たちに口頭で伝えられるだけではなく、スピーチ内容を手書きで紙に記録し、当時聞いていた生徒たちに渡された[64]。ナチズム体制下に生き残った生徒たちが、当時のシュタイナー学校の教師のスピーチを保管していたこと、そして教師の言葉を胸に、心の深い部分でシュタイナー学校の思い出を、生き生きと生き続けさせたことによって、100年を経た今もなお、世界中に広がり続けることとなり、そして生徒たちが保管していた教師の手書きによるスピーチ内容が、ナチズム期にシュタイナー学校が置かれた状況を解明する一つの重要な史料となったといえるだろう。

今後の課題は2点ある。1点目はボートマーがナチズム期にシュタイナー学校の校長として選出された理由についてさらに調査を進め、根拠となる史料から詳細を明らかにすること、2点目はナチ当局とボートマーとのやり取りを明らかにすることである。校長としてナチスからどのような指示を受けていたのか、そしてその指示に対して従ったのか否かについてさらに明らかにしたい。

本稿ではSelg（2019a）が述べているシュツットガルトのシュタイナー学校が1938年に閉鎖されるまでの数年間、ナチスから許容された[65]というのは、ボートマーの育った環境や背景、活動内容が関連しているのではないかと仮説的に結論づけた。

しかし、ボートマーが校長であることがナチスからシュタイナー学校が許容されたと即断するには史料が不十分であるため、今後さらなる史料収集と調査から究明していきたい。

追記：本稿の内容は2021年12月4日（日）に行われた幼児教育史学会第17回大会での口頭発表「ナチズム期のシュタイナー学校の状況について」を加筆修正したものである。

1　遠藤の論文（2017）ではシュタイナー学校のことをヴァルドルフ学校と記しているが、本稿ではシュタイナー学校に統一する。シュタイナー学校は、タバコ工場の社長エミール・モルト（Emil Molt,1876-1936）が、ルドルフ・シュタイナーに学校を設立してほしいと依頼し、設立されたものである。日本ではシュタイナー教育と呼ばれることが多いが、海外ではヴァルドルフ教育と呼ぶのが

主流である。

2　ルドルフ・シュタイナー教育芸術の友（Freunde der Erziehungskunst Rudolf Steiners e.V.）のサイトに掲載されている世界のヴァルドルフ学校、ヴァルドルフ幼稚園のリスト「Waldorf World List」によれば2021年5月時点で、世界には1251校のシュタイナー学校と1915園の幼稚園が存在する。https://www.freunde-waldorf.de/fileadmin/user_upload/images/Waldorf_World_List/Waldorf_World_List.pdf （2022年1月25日閲覧）

3　日本シュタイナー学校協会のサイト「正会員校」https://waldorf.jp/about/organization/ （2022年1月20日閲覧）

4　日本シュタイナー幼児教育協会のサイト 「全国の会員団体」一覧　https://jaswece.org/connection/preschool/ （2022年1月20日閲覧）

5　ユネスコスクール公式ウェブサイトに掲載されている「加盟校」 https://www.unesco-school.mext.go.jp/schools/results-school/?_sfm_acfsd_schooltype=%E3%81%9D%E3%81%AE%E4%BB%96（2022年1月20日閲覧）

6　ユネスコスクール公式ウェブサイトに掲載されている「サスティナブルスクール認定校一覧」https://www.unesco-school.mext.go.jp/network/join-the-project/sustainable/ （2022年1月20日閲覧）

7　子安美知子（1975）『ミュンヘンの小学生－娘が学んだシュタイナー学校－』中公新書。

8　広瀬俊雄、遠藤孝夫、池内耕作、広瀬綾子（編）（2020）『シュタイナー教育100年－80カ国の人々を魅了する教育の宝庫－』昭和堂。

9　学校法人シュタイナー学園（編）（2012）『シュタイナー学園のエポック授業－12年間の学びの成り立ち－』せせらぎ出版。

10　NPO法人京田辺シュタイナー学校（編）（2015）『親と先生でつくる学校 －京田辺シュタイナー学校12年間の学び－』せせらぎ出版。

11　遠藤孝夫（2017）「ナチズム体制下におけるヴァルドルフ学校の基礎的研究」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第16号、41-59頁。

12　遠藤孝夫（2019）「戦後ドイツにおけるヴァルドルフ学校の再建と『私立学校を設置する権利』」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第18号、51-68頁。

13　Werner, Uwe(1999): *Anthroposophen in der Zeit des Nationalsozialismus(1933-1945)*, Oldenbourg Verlag München, S.225-226.

14　遠藤、前掲、2019年、54-55頁。

15　Selg, Peter(2019a): Das Weiterleben im Tod: Die Ansprachen der Stuttgarter Lehrer bei der Zwangsschliessung der Schule 1938 , Freie Waldorfschule Uhlandshöhe(Hrsg.): *Festschrift 100 Jahre Freie Waldorfschule Uhlandshöhe 1919-2019*. Stuttgart: Buchhandlung ENGEL Antiquariat, S.58.

16　西平直（1999）『シュタイナー入門』、講談社。

17 広瀬俊雄ら（編）（2020）、前掲。

18 Loebell, Peter(2003): Graf von Bothmer,Fritz., Bodo von Plato(Hrsg.) *Anthoroposophie im 20. Jahrhundert: Ein Kulturimpuls in biografischen Porträts*, Verlag am Goetheanum, 2003, S.108-110.

19 Selg(2019a) a.a.O., S.53-59.

20 Selg,Peter(2019b): *Erzwungene Schliessung: Die Ansprachen der Stuttgarter Lehrer zum Ende der Waldorfschule im deutschen Faschismus(1938).*Aelesheim: Verlag des Ita Wegman Instituts, S.87-88.

21 遠藤、前掲、2017 年、46 頁。

22 Esterl, Dietrich(2006): *Die erste Waldorfschule: Stuttgart・Uhlandshöhe 1919-2004. Daten・Dokumente・Bilder*, Pädagogische Forschungsstelle beim Bund der Freien Waldorfschulen e. V.,Stuttgart: Bund der Freien Waldorfschulen, S.145.

23 遠藤、前掲、2017 年、41-42 頁。

24 遠藤、前掲、2019 年。

25 1929 年にナチ党の下部組織として設置され、ヒトラーの権力掌握後は唯一の教員組織として位置づけられた（遠藤、2017、44 頁）。

26 遠藤、前掲、2017 年、44 頁。

27 同上、44 頁。

28 同上、44 頁。

29 Eilers, Rolf (1963): *Die nationalsozialistische Schulpolitik : eine Studie zur Funktion der Erziehung im totalitären Staat*, Köln: Westdeutscher Verlag, S.93.

30 遠藤、前掲、2017 年、45 頁。

31 Werner, a.a.O., S.121.

32 遠藤、前掲、2017 年、51 頁。

33 同上、50 頁。

34 Priestman, Karen(2009): *Illusion of Coexistence: The Waldorf Schools in the Third Reich, 1933-1941*, Ph.D dissertation, Wilfrid Laurier University

35 ibid., p. ii .

36 広瀬俊雄ら（編）（2020）、前掲、7-8 頁。

37 名前の Graf は伯爵を意味する。在間進（2016）『アクセス独和辞典　第 3 版』、三修社、684 頁。

38 広瀬俊雄（2009）『シュタイナーの人間観と教育方法－幼児期から青年期まで－』ミネルヴァ書房、17 頁。

39 同上、17 頁。

40 Bothmer, Fritz Graf von(1959): *Gymnastische Erziehung*, Dornach: Pädagogische Sektion am Goetheanum Dornach

41 Ebenda, S.92.

42　国際ボートマー体操の公式サイト

https://bothmer-movement.de/index.php/home/bothmer-gymnastik　（2022 年 1 月 20 日閲覧）

43　なお、ボートマー体操の内容についてはギルバート･チャイルズ著、渡辺穣司訳（1997）『シュタイナー教育－理論と実践』イザラ書房及びドルナッハ・ゲーテアヌム教育部門と自由ヴァルドルフ連盟教育研究部門合同プロジェクト著、鳥山雅代＋ヴィリギリウス･フォーゲル訳（2021）『［新版］シュタイナー学校の全カリキュラム第 1 ～第 8 学年編－中心授業づくりのアドヴァイス，専科の授業の全体像，クラス運営と保護者の取り組み』特定非営利活動法人東京賢治の学校、水声社で紹介されている。

44　シュツットガルトのシュタイナー学校は最初に設立されたシュタイナー学校であり、およそ 100 年前の 1919 年 9 月 7 日に開校した。

45　Selg,a.a.O., 2019b, S.95.

46　Ebenda, S.9-16.

47　Ebenda, S.9.

48　Ebenda, S.14.

49　Ebenda, S.16.

50　Selg,a.a.O., 2019a, S.55.

51　Ebenda, S.55.

52　Ebenda, S.57.

53　Ebenda, S.57.

54　Ebenda, S.57.

55　Ebenda, S.58.

56　Ebenda, S.58-59.

なお、ボートマーに関しては原文を掲載する。

“Ich habe nun die Aufgabe hier auszusprechen, dass auf geheiß der württembergischen Regierung die Waldorfschule geschlossen ist. Wir wollen unsere Schule versiegeln in den tiefsten Tiefen unseres Herzens auf die Zukunft durch die Kraft der Liebe.”

57　Selg, a.a.O., 2019b, S.95.

58　Ebenda, S.86.

59　Selg,a.a.O., 2019a, S.58.

60　遠藤、前掲、2017 年、42 頁。

61　同上、54 頁。

62　Loebell,a.a.O., S.110.

63　Selg,a.a.O., 2019a, S.58.

64　Ebenda, S.59.

65　Ebenda, S.58.